

月刊
JMITU

アキコカ

新型コロナ対応版



「X'masプレゼント」

12月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガグループ分会 2021年発行

No.444

来期からは新たな人事制度

本当に良くなるのか？

昨年は、この時期に希望退職募集があり、かなりの人達が会社を去りました。

約一年が経ち、去っていった人達から「なかなかこのコロナ渦や年齢で再就職が厳しい。」「人材会社から紹介はあるが、賃金や待遇面で納得が出来ない。」と言う話を聞きます。

一方、希望退職を受けず残って頑張ろうという人達も、「辞めていった人達の仕事のがのしかかり、こんなことなら希望退職を受ければ良かった。」「新たな職場に異動になり、仕事を覚えたいが、在宅勤務が多い為なかなか先に進まない。」などと言う話も聞きます。

11月に発表された『2022年3月期第2四半期実績』に

においても、エンタテインメントコンテンツ事業が想定を大幅に上回り好調に推移している。

会社は構造改革、巣籠もり需要のおかげだと言っていた。

これだけの儲けが出るのに、昨年の希望退職募集は、本当に必要だったのだろうか、疑問に思ってしまう。

新たな成果主義

年末の里見会長挨拶の中にも出ましたが、来年4月からセガでは、新たな人事制度になります。「成果を挙げた社員、プロジェクト、組織に対してしっかりと報いることのできる仕組み、頑張った人が評価され、昇給、昇格していく制度」などと話されていました。

本当にそのような制度になるのだろうか？

成果主義の問題点は、成果が分かりにくいと言うことにあります。成果とは、営業で売上げが目に見えるものばかりなら分かるが、全てがそうではない、結果を判断するのも同じ人間の為、常に正当な評価が下されるわけではありません。

不当な評価は社員の不満を招くことになり、「いくら頑張っても無駄」と労働意欲の低下を招きやすくなります。

良く上司とのフィードバックで言われる事は「あなたならこの目標を達成できて当たり前なので評価できない。」などまさにこれでは頑張ろうと言う気になりません。

評価を得る為に、自分だけが持っている技術や知識を他者に教えない。技術を盗まれないようする為、誰かと連携して仕

事はせず、部署間はおろか個人の間でも交流が無くなつていきます。当たり前です、自分の成果を落としてまで、ライバルを増やし、クビになる確率を増やしません。

新たな新人事制度では評価の目的に「人材の育成」などが入っていますが、成果主義を人材育成の方法とするのが間違っているのは明白です。

セガは売上げに対しての利益率が少ないとよく言われますが、会社が考える一番簡単な改善策は、人件費を抑えること。毎年の昇給額を見れば一目瞭然です。毎年昇給率は下がっています。

経営者が価値を出せないの、何らかの理由を付けて安く給与を抑える。成果主義の目的は賃金抑制でしかない。

来春春闘は大幅賃上げを！

仙洞田一彦

誰でもよかった——手近な他人を巻き込む犯罪は以前からあったが、聞かされたに、たまたまそこに居合わせただけで殺されてはたまらないと思

った。八月は小田急で、十月は京王線でそのような事件があった。翌十一月は九州新幹線でも似たような事件があったという。今月は電車内ではなくビルの放火だが、居合わせた人を巻き添えにする事件があった。

電車の事件の動機は「死刑になりたい」ということらしい。アメリカの昔の小説に、冬の寒い間だけ刑務所に入っ

ていたくて犯罪を犯すというのがあった。百年前のニューヨークの刑務所が暖かかったかどうかは知らないが、建物の中だから公園のベンチで過ごすよりは、良かっただろうと推測できる。冬の間だけということから、あまり重い罪をおかすわけにはいかない。無銭飲食をするとか、商店のショーウィンドウに石をぶつけるとかである。だから良いという訳ではないが、ちよつと笑みも浮かぶ小説である。それにしても、巻き添えにされる店にとっては迷惑に違いない。

いっどこで巻き込まれるかわからない放火事件にコロナが重なっている。夏には新規感染者が東京だけで一日五千人を超えた。電車に乗り込ん

だとき、周囲に具合の悪そうな人はいないかとひそかに周りを見回す。そんな感じの人がいたら、そうっと距離を取

る。これも巻き添えを食わなためである。今、新規感染者の数が少なくなっているが、新手のオミクロン株は強力な感染力があるとされている。電車で事件があれば、具合の悪そうな人はいないかだけでなく、また別な目をして周りを観察しなければならなくなった。アブナイ人はいないか。今にも切れそうなのか、既に切れてしまつていそうな人とか。あんまりキョロキョロすると、逆に疑われたりしてしまふかも知れない。でも身を守るためには最大の警戒をしなければならぬ。私は今電車に乗っている。

平日の三時ごろで、立っている客はまばらだ。左斜め前方の向かい側の席で、さつきから周りをうかがっている男がいる。上着は黒色のダウン。下は黒に近いズボン。髪は濃い青色の作業帽で隠されていて分からない。白いありきたりのマスクをしている。マスクの下は髭を伸ばしているように、マスクの下から髭がのぞいている。帽子の庇の下とマスクの間から見える目は、鋭くはなく、右に左に落ち着

かなく動いている。窓からは明るい太陽光が差し込んでい

る。その太陽の光とは対照的に暗い雰囲気その男は漂わせている。逆だ。周りが明る

いからその男の暗さ、陰気さが目立つのだ。

人間は暗い夜にばかり犯罪

を起こすのではない。冬の傾いた太陽が車内をくまなく透らしているときだって、事件が起きないとは限らない。

その男にチラチラと視線をやりながら、私は考えていた。考えているうちに、事件が起きるのを期待しているのは、むしろ私自身のような気がして来た。あの男が突然立ち上がったって車内にガソリンをまく。とっさに私は、彼を制止する――。そういう過剰、過激な空想は避けなければならない。サスペンスドラマを好んでみる私の性格が反映しているかもしれない。

いや、しかし、だからこそそういう雰囲気を漂わせている人物に敏感なのだ。そうとも言える。

目的の駅といっても特別な

意味はない。家への帰り道だから自宅の最寄り駅に着いた。怪しい男とはお別れだ。電車を降り、今年はまだ大きな事件も起こらずに終わってほしいと思いつつながらホームを改札口に向かつて歩いた。一方で、衝撃的な事件を待ち望むような気持を抑えつけていた。

他人を巻き添えにする心理、誰でもいいという言葉は、社会全体への恨みの言葉のような気がする。サスペンスドラマの殺人事件の現場で交わされる、よく聞くセリフ「怨恨の線」。殺された人物を恨んでいる奴をまず探すのが、犯人捜しの第一歩ということだ。これをすつぽりあてはめると誰でもいいというのは、誰でも当てはまるということ。自分をこんなところに追い込

んだという怨みは、誰という特定の個人ではなく社会全体に向いているのだ。

改札に上る階段を上がりながら、自分のこの犯罪分析、発見に少し興奮した。自分の考えに、自分で感動しているのはどうかと思うが仕方ない。階段を上りきったところで改札口を見ると、さっき電車の中で見かけた男が改札から出て行くところだった。改札を出ると右に行った。私の家の方角と同じだから、別に尾行するわけではないが後に続いた。駅ビルを出ると、例の男が前を歩いていたが、関心はなくなった。電車という動く個室で、簡単には逃げられないという条件が、自分を追い詰めていたのだろう。逃げ場のないところに見ず知らず

の人と一緒に居るのは怖い。エレベーターだって、すぐ次の階に着くと思うから乗っていられるのであって、何時着くか分からなかったらとても乗れたもんじゃない。逃げ場がないと、怪しくない人まで怪しく見えてくる。怯えて来ると、怪しくないのに、怪しいところをさがそうとする。

日没まではまだ少しある。なんとも中途半端な時間だというか、夕暮れまでのゆとり気分だ。いつもゆっくりしているくせに、コーヒーでも飲んでゆっくりしようと思つた。ごくたまに寄る喫茶店がある道に曲がった。曲がった途端、私の顔にくつつかんばかりの近くに顔が突き出された。わたしは思わず顎を引き、顔を引いた。

「俺に、何の用だ」

さいわいマスクをしているから唾を浴びなかったが、でかい声だった。

「え」

と言いながら目の前の人物を見たら、見覚えのある帽子、見覚えのあるダウン、見覚えのある目付き。電車に乗っていた男だった。

「いや、その、私の家もこっちの方でして、あなた様に御用なんてあるわけではなくて」

「電車の中で俺のことをうかがっていただろう。何だ。なんの用だ。言え」

言ってみると言われても、まさか、他人を巻き添えにしようと思っっている怪しい男と思っで見っていた。オミクロン株を持っている人かも知れないと疑っていたなどとは言え

ない。

「すみません。すみません」

私は必死で繰り返し頭を下げた。右にも左にも逃げられる場所だったが、足がすぐんで動けなかった。

「人を疑いの目で見るとねえ」

「はい」

私はまた頭を下げた。余計なことはないわいい方がいい。男は私の返事を聞くと踵を返して去っていった。

ま、とにかくいきなり突き出されたのがあの男の顔で、刃物でなかったのが不幸中の幸いか。そう思わなければいけないか。気を取り直して、喫茶店のドアを押した。